

小学校 学級経営

小学校におけるキャリア教育に関する研究  
—児童の勤労観や職業観をはぐくむプログラムの開発・実施を通して—

教育相談課 研究員 近藤 雄

要 旨

小学校高学年において、勤労観や職業観の育成をねらいとしたプログラムを実施し、その効果を検証した。その結果、キャリア発達にかかわる能力（人間関係形成能力、将来設計能力、意思決定能力）の有意な向上が認められた。また、将来働く目的について検証した結果でも有意な変化が示され、勤労観や職業観の育成が認められた。これらの検証から、プログラムの効果が確認されたとともに、職業に関する体験活動の必要性が示唆された。

キーワード：小学生 勤労観 職業観 キャリア教育 職業的体験活動 人間関係形成能力

I 主題設定の理由

2007年に青森県総合社会教育センターは、本県の転職状況を調査し、若年者（20～34歳）において、早期に初職を離れる傾向があり、特に20～24歳で、1年以内に7割、3年以内に9割もの若年者が初職を辞めているという結果を明らかにした。同調査では、さらに、離職に至る理由として職場の人間関係を問題にした割合が全国調査と比べても高く、人間関係を形成する能力の育成を重要な課題と指摘している。また、本県の若年者のキャリア形成の調査結果（青森県総合社会教育センター、2007、2008）では、現在無業状態の若年者において、「専門的な知識や技術を磨きたい」「職業生活に役立つ資格を取りたい」「人の役に立つ仕事をしたい」という意識が低いことや「小学生期の職業体験」が少ないことを指摘している。

これらの調査結果から、勤労観や職業観、コミュニケーション能力などの人間関係を形成する能力を学校教育ではぐくむことは、学校と職業生活の接続という観点から見ても、重要であると考えられる。また、小学校段階での職業に関する体験的な学習活動は、勤労観や職業観の形成に有意義であるとも言える。

1999年の中央教育審議会答申より、キャリア教育の推進が提唱された。本県でも、チャレンジ精神あふれる「人財」の育成をねらいとする「あおもりを愛する人づくり戦略」を策定し、「生きること・働くことについて考える学習活動（キャリア教育）」の推進を図っている。中学校や高等学校などで職業体験活動が行われるなど、キャリア教育の広がりを見せている。

昨年度、青森県総合学校教育センターで行われた講座の受講者（159名）を対象に行ったキャリア教育実態調査によると、約9割もの教員がキャリア教育という言葉の認知や小学校段階での必要性を示したが、実施率は約6割に留まった。実施上の課題として、時間的な余裕のなさや具体的な指導内容の周知不足、教育計画立案の困難さなどを指摘した意見が数多く挙げられた。

つまり、文部科学省や県教育委員会のキャリア教育推進の取組によって、キャリア教育の必要性や重要性の認識は高まりつつあるものの、先に挙げられたような理由で、学校現場では十分に実施されていないことが考えられる。よって、キャリア教育がより実施されるには、具体的な指導内容等の普及とともに、キャリア教育の有効性の検証が必要であると思われる。

そこで、本研究では、勤労観や職業観をはぐくむことをねらいとしたプログラムを開発し、実施する。具体的には、職業にかかわる体験的学習であり、なおかつ、人間関係を形成する能力の育成に焦点を当てたプログラムを構築する。そして、児童の勤労観や職業観に対する有効性について検証していきたい。

II 研究目標

小学校高学年の児童の勤労観や職業観を高めるためには、人間関係を形成する能力の育成に焦点を当てたキャリア教育のプログラムの開発・実施が有効であることを、実践を通して明らかにする。

### Ⅲ 研究仮説

小学校高学年の児童に対して、人間関係を形成する能力の育成に焦点を当てたキャリア教育のプログラムを開発し、実施すれば、勤労観や職業観を育成することができるであろう。

### Ⅳ 研究の実際と考察

#### 1 キャリア教育について

1999年、中央教育審議会答申「第6章学校教育と職業生活との接続」で、キャリア教育は「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義された(文部科学省, 1999)。

この定義は、今日のキャリア教育の出発点として位置付けられ、現在の様々なキャリア教育の施策に大きな影響を与えている。さらに、文部科学省(2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」では、「キャリア」の概念を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と示し、キャリア教育を端的に「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義した。

#### 2 勤労観・職業観について

国立教育政策研究所(2002)は、勤労観や職業観を「職業や勤労についての知識・理解及びそれらが人生で果たす意義や役割についての個々人の認識であり、職業・勤労に対する見方・考え方、態度等を内容とする価値観である。その意味で、職業・勤労を媒体とした人生観ともいえるべきものであって、人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するかの基準となり、また、その後の生活によりよく適応するための基盤となるもの」と定義している。よって、勤労観や職業観は、勤労や職業にかかわる価値観と考えられる。

また、三村(2004)は、勤労観と職業観について、構造化するとともに、「勤労観とは、自分が社会のなかである役割を果たすことに喜びを持つことです。一方職業観は、どんな部分で自分は社会の役に立てるのかを考えながら、職業についての理解を深め、方向性を定めていくというものです。最初に勤労観の育成があり、それを土台として職業観を育成すると考えるとよい」と述べている。さらに、小学校では係活動などを通じて勤労観を育成し、中学校や高等学校ではそれを受け継いで職業観を育成するのがよいと提案している。

勤労観や職業観の育成がキャリア教育の主目標ならば、職業決定を強いたり選択の幅を狭めたりするのは、キャリア教育本来の内容ではない。特に、進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期である小学校段階は、勤労観をはぐくむことに主眼を置くべきと考える。よって、本研究で構築するプログラムは、学校や家庭、地域での自分の役割について、その意味や果たす意義を考え、役割を果たす喜びを味わう体験を通して、豊かな勤労観や職業観を育成していく内容とした。

#### 3 キャリア教育でねらう力

では、勤労観や職業観をはぐくむために、どのような能力を身に付けさせていくべきか。国立教育政策研究所(2002)は、「職業観、勤労観を育む学習プログラムの枠組み」の中で、表1のように例示している。

さらに、小学校段階の主な課題について、「この時期の主な発達課題としては、夢や希望を描き自分はこんな人間になりたいという自己イメージを獲得すること、そのため、自己及び他者への積極的

関心を形成し発展させ、身の回りの仕事や環境に対する関心・意欲を向上させること、勤労を重んじ目標に向かって努力することの大切さを、身をもって学んでいくことなどがあげられる」と述べている。

表1 職業的(進路)発達にかかわる諸能力

領域	領域説明	それぞれの能力
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 【コミュニケーション能力】
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 【職業理解能力】
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 【計画実行能力】
意思決定能力	自らの意思と責任によりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 【課題解決能力】

(国立教育政策研究所(2002)「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」から一部引用)

また、クランボルツ(2005)は、「計画された偶発性 (Planned Happenstance Theory)」というキャリア開発の理論を提唱した。「自分の将来を今決めるよりも、積極的にチャンスを模索しながら、オープンマインドでいるほうがずっとよいのです。ひとつの職業にこだわりすぎると視野が狭くなってしまいます」という考えは、小学校段階でのキャリア教育の在り方を裏付けていると言える。

よって、国立教育政策研究所が例示した能力を身に付けさせ、児童一人一人のキャリア発達を支援していくことが、小学校段階でのキャリア教育の在り方であると考えられる。

さらに、三村(2004)は、キャリア発達の土台となる勤労観が十分にはぐくまれていない上で職業観を育てる職場体験などの活動を行っても、必ずしもいい効果は望めないと述べている。文部科学省(2006)は、「小学校では、既存の教育活動のなかにキャリア教育と関連する内容が数多くある」と指摘し、係活動などの身近な活動を通して、自らの役割を果たそうとする意欲や態度をはぐくんでいくことが大切と述べている。

よって、本研究で実施するプログラムは、職場体験学習ではなく、普段の授業やこれまでに実践されている内容を基にした活動で構築を行うとともに、「職業観、勤労観を育む学習プログラムの枠組み」の職業的(進路)発達にかかわる諸能力の育成を、プログラムの中に位置付けることとした。

#### 4 プログラムの実際

##### (1) プログラムの実施時期・対象

- ・ 実施時期：平成21年6月～9月(計8時間)
- ・ 対象：協力小学校6年生 1学級(男子22名 女子17名)
- ・ 授業者：研究員 近藤雄
- ・ 実施場所：教室、特別教室等
- ・ 指導時間：道徳の時間、特別活動(学級活動の時間)

##### (2) プログラムの実際

先行研究では年間を通じた長期的な取組が数多く報告されているが、本プログラムは、短期的に集中して実施できるように全部で8時間の設定とした。

また、実施に当たって、本研究がキャリア教育の普及の一助となるよう、職業にかかわる体験的学習の実施や、育てたい力(職業的(進路)発達にかかわる諸能力)の明確化、他教科との関連を図った。

さらに、勤労観や職業観の育成を主な目標とするため、進路を決定させて将来の道を限定してしまうのではなく、国立教育政策研究所(2002)の調査報告書の中で述べられた小学校段階での主な課題、すなわち、「夢や希望を描き自分はこんな人間になりたいという自己イメージを獲得する」ことを、プログラム全体の学習課題とした。

##### ア キャリア教育と道徳の時間

小学校学習指導要領(2008)の改訂に当たり、道徳教育の目標に「児童が自己の生き方についての考えを深め」ることが追加され、自らの生き方についての考えを深めることが重要であると示された。この点からも、「自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる」キャリア教育と重なる部分が多いことが分かる。よって、道徳の時間での学習を生かし、自他の理解を深め、自分の立場や役割に気付かせ、一人一人のキャリア発達の支援を図ることとした。

##### イ キャリア教育と特別活動

小学校学習指導要領(文部科学省、2008)において、特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」と示されている。

道徳の時間と同様に、特別活動もキャリア教育と重なる部分が多い。よって、特別活動を通して勤労観や職業観をはぐくむことができると考えた。さらに、自分や他者への気付きをより深めるために、構成的グループ・エンカウンター(SGE)やグループワーク・トレーニング(GWT)を活用することとした。SGEは、自己理解・他者理解・自己受容・感受性の促進・自己主張・信頼体験などをねらいとしている。GWTは、グループ活動での相互作用により、子どもたちが体験的に人間関係を学び、よりよい人間として自ら成長していくことをねらいとしている。活動に当たっては、将来の夢や目標に対する自己理解・他者理解を深めるため、将来の夢や職業に関するエクササイズをプログラムに構成した。

##### ウ キャリア教育プログラム

以上をふまえて、道徳の時間と学級活動の時間を活用し、なおかつ、職業的(進路)発達にかかわる

諸能力の育成を主な目標とした本プログラムを、以下のように構築し、実施した。

No.	プログラム	ねらい	育てたい能力
1	どんな職業があるのかな？	職業ウェビングマップの作成を通して、職業には様々ななかかわりや役割があることに気付くことができる。	【職業理解能力】 【役割把握・認識能力】
2	「働く」ということ	読み物資料を通して、働くことの意義を理解するとともに、人々のために役立つ仕事をしようとする。	【役割把握・認識能力】 【自他の理解能力】
3	必要のない人なんていない	S G E・G W Tのゲーム活動を通して、誰もが不可欠な存在であることや役割の意義に気付くことができる。	【情報収集・探索能力】 【コミュニケーション能力】
4	どんな職業につきたい？	S G Eのエクササイズを通して、自分の将来のことや職業への興味・関心をもつことができる。	【選択能力】 【職業理解能力】
5	あこがれの職業人	S G Eのエクササイズを通して、将来の夢に対する前向きなイメージをもつことができる。	【計画実行能力】 【職業理解能力】
6	ドリームマップを描こう	ドリームマップの制作を通して、将来の夢に対する前向きなイメージを図に表すことができる。	【計画実行能力】 【職業理解能力】
7	今、できること	読み物資料を通して、将来の夢に対してできることや自分の役割を果たそうとする。	【計画実行能力】 【課題解決能力】
8	夢を語り合おう	ドリームマップの発表を通して、将来の夢に対する前向きなイメージをもつことができる。	【課題解決能力】 【職業理解能力】

### (3) 検証尺度について

#### ア キャリア教育評価尺度

瀧本(2006)作成の「キャリア教育評価尺度」を使用した。国立教育政策研究所が例示した職業的(進路)発達にかかわる4領域8能力に沿って48項目で構成され、5件法の回答で、5～1点を与えている。

#### イ 職業観テスト

国立教育政策研究所(2005)作成の職業観を尋ねる調査項目を使用した。将来働く目的について、12項目の質問で尋ねている。回答は4件法からなり、4～1点を与えている。

## 5 結果と考察

### (1) キャリア教育評価尺度

表2 キャリア教育評価尺度(総得点と下位尺度)のt検定結果

表2は、「キャリア教育評価尺度」の総得点と下位尺度、すなわち、職業的(進路)発達にかかわる4領域8能力それぞれについての結果を示したものである。回答の平均値をt検定で比較し、プログラムの効果の測定を図った。

総得点において、有意差が見られた。

	人数	プレ	ポスト	t値	有意差	
キャリア教育評価尺度総得点 (4領域8能力総得点)	39	187.13	198.54	-3.95	**	
人間関係形成能力	自他の理解能力	39	24.00	25.28	-2.21	*
	コミュニケーション能力	39	22.44	23.72	-2.67	*
情報活用能力	情報収集・探索能力	39	23.23	24.33	-1.66	n.s.
	職業理解能力	39	21.85	23.00	-1.98	†
将来設計能力	役割把握・認識能力	39	24.99	26.33	-4.33	**
	計画実行能力	39	23.03	24.82	-4.13	**
意思決定能力	選択能力	39	24.23	25.69	-3.34	**
	課題解決能力	39	23.87	25.36	-2.34	*

\*\*<.01 \*<.05 .05<†<.10 .10≦ n. s.

4領域8能力については、「情報活用能力」以外の3つの能力で、有意差を確認することができた。

#### 〈考察〉

#### ア 人間関係形成能力

プログラムでは、S G EやG W Tをもとに、ゲーム活動やエクササイズを行った。その際、将来の夢や活動後の感想などを互いに聞き合わせ、他者理解を深めさせることに留意した。また、他者から認められる場面を設定し、自分の役割の意義に気付かせる活動も行った。

t検定の結果から、自他の理解能力が向上したとともに、互いに考えや気持ちを伝え合うコミュニケーション能力も高まった可能性を考えることができる。

活動後、児童から、「他の人の夢を知ることができて楽しかった」「自分の夢に自信が持てようになった」などの感想が挙げられた。

## イ 情報活用能力

プログラムでは、職業の多様さや学ぶこと・働くことの意義に気付かせることをねらいとして、ウェビングマップの作成を行った。また、自分の情報を伝え合うGWTの活動を行った。

しかし、結果において有意な変容を認めることができず、プログラムによる効果を確認できなかった。その要因として、進路や職業について調べたり、調べる方法を学んだりする活動をプログラムに設定していなかったことが考えられる。

## ウ 将来設計能力

将来設計能力を高めるための手立てとして、プログラムでは、憧れの職業人になりきらせたり、図1のようなドリームマップの制作や発表を行わせたりして、将来の夢や希望の具体的なイメージ化を図った。さらに、将来の夢に向かって努力する意義を感じさせたり、将来の夢に向けて今できることを見つけさせたりして、自己の生活や将来を設計する意識、つまり、自己のこれからの生き方について考える意識を高めさせた。また、図2のように、将来の夢について語り合う時間を設け、自他の夢を肯定的に認め合える機会を設定した。

結果から、得点の有意な上昇を確認することができ、将来の夢のイメージ化や児童相互のかかわり合いを設定したことが、将来を設計する能力の高まりにつながったと考えられる。

プログラムの中で、児童は、「美容師になったとき、きちんと接客できるように、全ての勉強をがんばる」「声優を目指して、まずは学習発表会の練習をがんばる」など、将来に向けた取組を表現した。活動後には、「人に話すことで、夢が叶いそうな気がしてきた」「夢実現の自信がついた」などの感想が挙げられた。

## エ 意思決定能力

プログラムの中で、児童は、自分の長所について考えたり、やってみたい職業を選んだりした。また、SGEのエクササイズを通して、自分の長所や将来の夢を互いに認め合う活動も行った。

結果から、様々な活動を通して自他の理解が深まり、そのことが主体的に判断し選択する能力の高まりにつながった、と考えられる。

プログラムに対する保護者からのアンケートでは、「自分自身を見つめ直し、子どもなりに考え方を展開していく様子が見られた」という報告が挙げられている。

## オ キャリア教育評価尺度総得点

プログラムでは、先述した学習課題に向けて、人間関係の形成を意識させながら、将来の夢や希望を前向きにイメージしたり、身の回りの仕事や環境に対する関心・意欲を高めさせたり、あるいは、目標に向かって努力する大切さや勤労の重要さなどに気付かせたりする活動を行った。

結果によると、総得点で有意に得点が向上した傾向が見られ、プログラムの効果が確認された。すなわち、職業的（進路）発達にかかわる諸能力がプログラムによって向上されたと考えられる。

活動を振り返った児童から、「今回の勉強で、職業のことがよく分かった」「夢がはっきりしてきた」「（夢に向かって）今、絵を描くことをがんばっている」などの感想が挙げられた。

## (2) 職業観テスト

表3は、「職業観テスト」の下位尺度についての結果を示したものである。回答の平均値をt検定と比較し、プログラムの効果測定を図った。さらに、12項目それぞれのプレテストの結果をもとに、クラスター分析によって高群と低群に分け、さらに、プレテストとポストテストの平均値を比べることで、意識の変化をとらえることができると考えた。

「人の役に立つため」「人と仲よくするため」「世の中をよくするため」の項目は、学級全体で増加の変化を有意に示した。したがって、プログラムの実施によって、これらの意識が高くなったと考えられる。

逆に、「偉くなるため」「お金持ちになるため」の項目は、学級全体で減少の変化を有意に示し、プログラムの実施によって、これらの意識が抑えられたと考えられる。



図1 児童が制作したドリームマップ一例

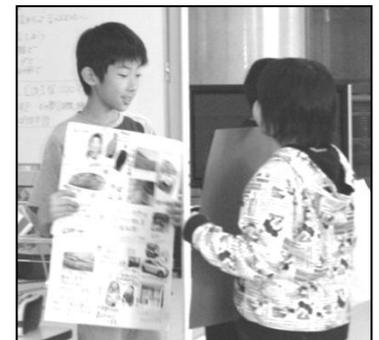


図2 将来の夢を互いに語り合う

「人に認められるため」「暮らすのに必要なお金をもらうため」「貧乏にならないため」の項目は、高群と低群で逆の変化を有意に示した。プログラムによって、高群では減少の変化を示し、低群では増加の変化を示したと思われる。

「働くのは当たり前だから」の項目は、低群が増加の変化を有意に示し、プログラムにより、低群の意識が高くなったと言える。

「自分の得意なことを生かすため」「やりたいことをするため」「遊ぶのに必要なお金をもらうため」の項目は、高群・低群どちらも有意な変化を確認できず、これらに関しては、プログラムの効果が認められなかった。

〈考察〉

ア 「人の役に立つため」「人と仲よくするため」「世の中をよくするため」

〈学級全体で増加の変化を有意に示した項目〉

プログラムでは、SGEやGWTをもとにした活動を行わせ、自他理解の深化を図った。その上で、図3のようなドリームマップの制作を通して、友達や家族にしてあげたいこと、こうなってほしい社会や世界について、具体的にイメージさせた。加えて、自分の仕事の価値や誰かの役に立つよさについて気付かせ、働く意義について考えさせる学習を行った。

結果を見ると、“人の役に立ちたい”“人と仲よくしたい”“世の中をよくしたい”という働くことへの価値観が、学級全体で高まっている。特に、低群において、“人と仲よくしたい”“世の中をよくしたい”の価値観が高まっている。このことは、プログラムにより、友達や家族、社会などの人間関係の形成を意識させた活動が、他者や社会に対する意識の高まりにつながったと考えられる。

プログラムに対するアンケートで保護者から家庭の様子を聞いたところ、「将来、大きい家を建ててあげると言ってくれた」という他者を意識したと思われる報告もあった。

イ 「偉くなるため」「お金持ちになるため」

〈学級全体で減少の変化を有意に示した項目〉

文部科学省(2006)は「係活動や委員会活動、清掃活動、勤労生産的な活動等を通して、自らの役割を果たそうとする意欲や態度をはぐくんでいくことが大切である」とキャリア教育の在り方を示している。プログラムでも、行事の取組を振り返らせ、“誰かの役に立つよさ”に気付かせる活動を行った。また、SGEのエクササイズで自他理解を深めさせながら、自分の好きなことや得意なことをもとに将来の夢や希望を広げさせた。

その結果、学級全体、特に、高群において、“偉くなりしたい”“お金持ちになりたい”という働く動機として副次的な目的の価値観が低くなったと考えられる。

表3 職業観テストの各下位尺度のt検定結果(全体・高群・低群)

働く目的	人数	プレ	ポスト	t 値	有意差	
偉くなるため	全体	39	2.41	1.77	3.46	**
	高群	17	3.29	1.82	6.93	**
	低群	22	1.73	1.73	0.00	n. s.
人に認められるため	全体	39	3.26	3.13	0.66	n. s.
	高群	32	3.56	3.06	2.88	**
	低群	7	1.86	3.43	-7.78	**
お金持ちになるため	全体	39	2.82	2.41	2.20	*
	高群	26	3.38	2.58	4.20	**
	低群	13	1.69	2.08	-1.24	n. s.
自分の得意なことを生かすため	全体	39	3.44	3.56	-0.90	n. s.
	高群	35	3.66	3.63	0.24	n. s.
	低群	4	1.50	3.00	-2.32	n. s.
やりたいことをするため	全体	39	3.36	3.46	-0.61	n. s.
	高群	33	3.67	3.58	0.57	n. s.
	低群	6	1.67	2.83	-2.45	†
遊ぶのに必要なお金をもらうため	全体	39	1.95	1.92	0.16	n. s.
	高群	9	3.33	2.67	1.79	n. s.
	低群	30	1.53	1.70	-1.04	n. s.
暮らすのに必要なお金をもらうため	全体	39	3.85	3.77	0.90	n. s.
	高群	33	4.00	3.79	2.94	**
	低群	6	3.00	3.67	-3.16	**
人と仲よくするため	全体	39	2.92	3.49	-3.64	**
	高群	31	3.26	3.55	-1.96	†
	低群	8	1.63	3.25	-6.18	**
人の役に立つため	全体	39	3.54	3.85	-2.63	*
	高群	36	3.69	3.86	-1.97	†
	低群	3	1.67	3.67	-3.46	†
世の中をよくするため	全体	39	3.28	3.77	-3.14	**
	高群	33	3.61	3.82	-1.88	†
	低群	6	1.50	3.50	-4.47	**
働くのは当たり前だから	全体	39	2.77	2.79	-0.14	n. s.
	高群	26	3.35	3.00	1.67	n. s.
	低群	13	1.62	2.38	-2.54	*
貧乏にならないため	全体	39	3.15	3.00	0.86	n. s.
	高群	29	3.66	3.14	3.36	**
	低群	10	1.70	2.60	-2.38	*

\* < .01    \* < .05    .05 < † < .10    .10 ≤ n. s.

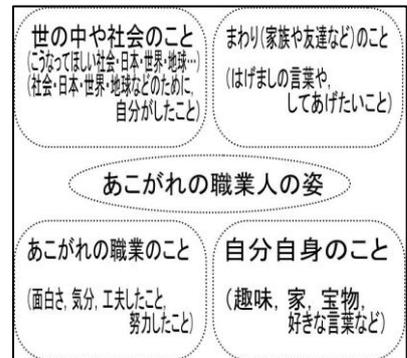


図3 提示したドリームマップの例図

プログラムの中で児童が語った将来の夢には、「命を救う看護師」「お客さんに喜ばれるネイリスト」など、自分の役割を果たしたいという思いがこめられた意見や、「世界一のゴールキーパー」「楽しいゲームを作る制作者」など、興味や関心に基づいた夢が確認できた。

#### ウ 「人に認められるため」「暮らすのに必要なお金をもらうため」「貧乏にならないため」

〈学級全体では有意な変容は見られなかったが、高群で減少、低群で増加の変化を有意に示した項目〉  
先述したように、プログラムでは、働く意義の理解や将来の夢の具体的イメージ化、人間関係の形成を意識させた活動などを行った。

その結果、学級全体で“誰かのために何かしたい”“自分の興味や関心に基づいた夢を実現したい”という意識が高まり、“人に認められたい”“お金をもらいたい”という副次的な目的意識の強かった高群の価値観が低下したと考えられる。

その一方、低群では、将来の自分の生活（将来やりたいことやほしいことなど）をイメージする活動の影響を受け、“仕事をして、人に認められたい”“仕事をして、生活するお金を得たい”という意識が高まったと考えられる。

#### エ 「働くのは当たり前だから」〈低群で増加の変化を有意に示した項目〉

プログラムでは、職業の多様さやつながりをとらえさせるとともに、それぞれの職業の役割や意義に気付かせる活動を行った。

「働くのは当たり前だから」の意識が低群で増加の変化を示したことは、プログラムにより、働く意義を感じ取ったことが要因と考えられる。

学習後、児童の感想には「知らない職業などないんだ」「どれか一つの職業でもなくなれば、ご飯が食べられなくなってしまう」など、働くことや職業への考えの深まりを示唆する報告があった。

#### オ 「自分の得意なことを生かすため」「やりたいことをするため」「遊ぶのに必要なお金をもらうため」

〈学級全体、高群・低群、有意な変化なし〉

プログラムでは、自己理解を深めさせるために、自分の好きなことや得意なことを用いてSGEのエクササイズを行った。また、働くことの意義について考えさせる活動も行った。

しかし、高群・低群どちらでも有意な変化が認められなかった結果から、プログラムの効果が影響しなかったと思われる。そのため、好きなことや得意なことに対しての有用感を育てる手立てや、働く意義についてさらに深く考えさせるような働きかけが必要と考えられる。

### (3) 学級担任の行動観察と内省報告から

協力学級担任から聞いた児童の変容について、以下に記載する。

- ・ 将来に向かって堅実に準備しなければならないと思うようになった、と感じられる。
- ・ 以前より前向きに、そして現実的に将来のことを考えるようになった。
- ・ 自主学習ノートが、以前より充実してきている。
- ・ 他学級の児童に自分のドリームマップを見せながら話す児童の姿も見られた。

報告から、職業的（進路）発達にかかわる能力の高まりが、担任の目にも具体的な行動として確認されていることが分かる。さらに、学習に臨む姿勢についての変容も見られ、勤労観や職業観をはぐくむ学習のさらなる有効性が感じられた。

次に、協力学級担任から聞いた自身の内省の変容について、以下に記載する。

- ・ 学習と職業とを関連付けて話すことがある。
- ・ 児童の夢を知ったことで、それぞれに応じて機会がある度に話しかけるようになった。
- ・ 夢が叶うことを願いつつ、力不足な面について、将来を見据えたアドバイスをするようになった。
- ・ その児童なりに“夢をもってがんばらなきゃ”と思う気持ちがあることが、分かった。

三村(2004)は、キャリア教育の効果として、キャリア教育にかかわる教員の意識の変化を挙げている。担任の報告からも、プログラム前後での意識の変容を感じることができた。勤労観や職業観をはぐくむ学習の有効性の一つとして挙げられる。

## V 研究のまとめ

本研究では、小学校高学年の児童の勤労観や職業観を高めるために、人間関係を形成する能力の育成に焦点を当てたキャリア教育のプログラムを開発し、その効果を検証した。その結果、プログラムの効果として、主に、以下について確認することができた。

- ・ 職業的（進路）発達にかかわる「人間関係形成能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の能力向上
  - ・ “人の役に立ちたい” “人と仲よくしたい” “世の中をよくしたい” という人間関係の形成に関した働く価値観の向上
  - ・ “偉くなりたい” “お金を得たい” “人に認められたい” という副次的な働く価値観の低下
  - ・ 低群の児童における“働くのは当たり前のことである”という働く意義についての理解の向上
- 保護者や担任の行動観察の報告からも、児童のこうした能力や意識の変容の可能性が示唆されている。

以上のことから、小学校高学年児童に対し職業にかかわる体験的活動や人間関係を形成する活動は、職業的（進路）発達にかかわる能力を向上させるとともに、勤労観や職業観を高める効果があると考えられる。

## VI 本研究による課題

「キャリア教育評価尺度」での「情報収集・探索能力」, 「職業観テスト」での「得意なことを生かすため」「やりたいことをするため」「遊ぶのに必要なお金をもらうため」の項目において、学級全体で有意差は見られず、プログラムの効果が確認されなかった。そのため、勤労観や職業観をさらに高めるためには、職業にかかわる体験的活動をさらに取り入れるなどの手立てが必要であると考えられる。

三村(2004)は、キャリア教育が教育活動全体を通じて行われることで、学習効果の相乗的な高まりや、進路や生き方に主体的に考え取り組む力の育成が期待できると示している。児童の勤労観や職業観をより高めるには、教科・領域と横断的に関連付けたり、その核となるプログラムを取り入れたりすることが重要であると考えられる。

### <引用文献>

- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」, p. 21, p. 41, pp. 47-48
- 三村隆男 2004 『キャリア教育入門』, p. 64, 実業之日本社
- ジョン・クランボルツ 2005 『その幸運は偶然ではないんです!』, p. 32, ダイヤモンド社
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領』, p. 13, p. 104, p. 112

### <引用URL>

- 文部科学省 1999 「中央教育審議会答申 第6章学校教育と職業生活との接続」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/991201g.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201g.htm)(2009. 1. 20)
- 文部科学省 2004 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/003.htm)(2009. 1. 20)
- Benesse 教育開発センター 2004 『VIEW21』2004年4月号「実践に向けて『キャリア教育』に中学校ではどう取り組むか」  
[http://benesse.jp/berd/center/open/chu/view21/2004/04/c01toku\\_10.html](http://benesse.jp/berd/center/open/chu/view21/2004/04/c01toku_10.html)(2008. 8. 1)
- 文部科学省 2006 「小学校・中学校高等学校 キャリア教育推進の手引ー児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/06122006.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/06122006.htm)(2009. 1. 20)

### <参考文献>

- 青森県総合社会教育センター 2006 「若年層の職業観と学習活動に関する調査研究報告書」
- 秋田稲美 2006 『ドリームマップ 子どもの“生きる力”をはぐくむコーチング』 大和出版
- 国立教育政策研究所編 2005 生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書(I)ー児童・生徒のキャリア発達に関する質問紙調査ー
- 瀧本景子 2006 「小学校高学年におけるキャリア教育発達測定尺度の作成と検討ー『職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み』に沿ってー」 滋賀大学教育学部職業指導研究室修士論文
- 日本キャリア教育学会 2008 『キャリア教育概説』 東洋館出版社
- 村田美佳 2007 「若年層における世代別キャリア形成支援の方向性」, 青森県総合社会教育センター 平成19年度研究紀要第19号

### <参考URL>

- 青森県総合社会教育センター 2007 「若年層の生活体験に関する調査研究報告書」  
<http://alis.net.pref.aomori.jp/research/H19namasha/H19enquete.pdf>(2008. 12. 24)